

東京・尾張藩上屋敷跡遺跡 おわりはんかみやしき

- 1 所在地 東京都新宿区市谷本村町
- 2 調査期間 二〇〇三年(平15) 八月～二〇〇四年九月
- 3 発掘機関 東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財セン

ター

- 4 調査担当者 内野 正・小林博範

- 5 遺跡の種類 大名屋敷他武家地

- 6 遺跡の年代 江戸時代

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

尾張藩上屋敷跡遺跡は、武蔵野台地東端部を形成する台地のひと



(東京西北部)

つ、淀橋台の一角に立地する。周辺には小支谷が発達し、淀橋台も北側を長延寺谷、南側を旧紅葉川(現靖国通り)によって挟まれた舌状の地形をなす。
 本遺跡周辺においては旧石器時代、縄文時代、古代の遺構・遺物も検出されて

おり、古くからの人々の生活が展開していたことが知られるが、本格的に開発の手が加わるのは江戸時代以降である。江戸時代には主に武家地として利用され、板倉周防守下屋敷(一七世紀前半～明暦二年(一六五六)、広瀬藩市谷邸(寛文六年(一六六六)～明和五年(一七七八)、尾張藩市谷邸(明暦二年～幕末)などの大名屋敷の他、旗本配下の組屋敷などがあった。

本遺跡は防衛庁移転計画事業により一九九一年～二〇〇二年まで調査が行なわれた。今回の調査は防衛庁市ヶ谷庁舎の新設建物建設工事に伴うもので、調査地は旗本組屋敷・百姓地、広瀬藩市谷邸、尾張藩市谷邸と変遷を経てきた地点である。調査の結果、第一面から第三面にわたる三時期の遺構面が確認された。第一面は一八世紀後半～幕末の時期で、尾張藩市谷邸時代に相当し、礎石や石組溝など長屋建物を構成する遺構や、住人が使用した遺物が発見された。第二面は一七世紀後半～一八世紀前半の時期で、旗本組屋敷に関連すると思われる井戸や地下室が発見された。第三面は一七世紀前半を中心とする時期で、砂採掘土坑が多数検出された。

墨書のある木製品は四点出土している。木簡出土遺構は、共伴した陶磁器・土器から五九―三G―一号遺構(井戸)は一七世紀前葉～中葉(第二面から第三面)。六三―三I―一号遺構(土坑または地下室)は、一八世紀後葉～一九世紀初頭(第一面)、六七―三M―二号遺構(井戸)は一八世紀前葉(第二面)に位置付けられる。なお、こ

の他にも穿孔を有し木簡と形状のよく似た木札が五点ほど出土しているが、これらには墨は確認できなかった。

8 木簡の釈文・内容

五九—三G—一（井戸）

- (1) ・「中勝エ
・「御長×

(101)×14×6 019

六三—三I—一

- (2) ・「江戸市買御 鋪二而
・梶恒吉×

(144)×40×45 019

六七—三M—二

- (3) ・「

- ・「

125×32×5 033

- (4) ・「六蔵

- ・「

76×26×3 011

いずれもその特徴から、木札として使用されたものと考えられる。
(1)(2)(4)は宛先の記された荷札と考えられる。(2)の「市買御 鋪」は、市谷御屋敷（尾張藩市谷邸）のことである。

9 関係文献

東京都埋蔵文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅻ』（二〇〇六年）

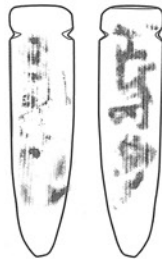
（内野 正）



(1)



(2)



(3)



(4)